# 象徴ということ

千谷七郎

昨年の四月インドシナの南北の戦いが終ったとき、ことの善し悪しは別として、これで戦後が一区切りされて、これから東アジアの新形勢が固まる思いがした。戦時中のわが軍の仏印進駐、やがて戦後期にはいって北ベトナムとフランスの戦い、そしてアメリカの肩代りの続いた戦乱が終焉したのだから。

がしかし、さらに昨年秋の天皇、皇后両陛下のご訪米を見て、いよいよ完全に戦後の終了を泌々感じさせられた。それと同時にこれからは、われわれ日本人はもう戦後などといっていられない、国民の責任において内外の問題の何事も進めて行かなければならないという新な覚悟に身の引き締まる思いがしたものであった。

両陛下ご訪米の期間、私は国際学会に出席のためヨーロッパにいた。学会を終えて帰国前の数晩を旧知の西独の哲学者のところで過ごした。二人でワインを傾け合っていたその或る晩、彼がぽつりと「ちかごろ日本では国民の天皇に寄せる信頼はどうか」と聞いて来た。私はおやっ？　と思った。四年前、両陛下のヨーロッパ諸国ご訪問の折、西独では大変に歓迎を受けられているという報道があったので、そのことについて日本人として有難く思っている旨の手紙を彼に書いたところ、このことに関しては彼のその後の手紙の中には一言も触れてなかった。

それからしばらく経過して二年半前にやはり彼の地であったときは、ちょうどウインザー公（エドワード八世、在位一九三六年一月―十二月）が、退任されて以来住みついていられたフランスで亡くなられて話題になっていた頃であった。彼はそのとき、ウインザー公は賢明な人であったと感慨深そうに私に語った。どうしてか、と聞き返すと、ウインザー公は第二次大戦の勃発を予見していたから退位したのだ、という答えであった。私は意外の感を抱かせられた。それは私のまだ医科の学生

の頃であった。エドワード八世はアメリカのシンプソン夫人との結婚がイギリス議会と回教徒からの承認がえられなかったために退位されたということで、その当時王位を賭けた世紀の恋として話題を呼んだ記憶だけが私には生々しく残っているだけであった。そんなわけで、私は意外の感に打たれたわけであったが、考えて見ればありうることとも思われた。ウインザー公の回顧録は既に一九五一年に刊行され、ドイツ訳も既に「一人の王の物語り」として出版されていたから、わが友人はそれらを読んで、さきほどの発言となったわけであろうと一瞬に観取されはした。しかし同時に私には、敗戦後に天皇退位の議論があったことが回想されたためか、そういう一身上の都合で退位される人は幸せだろう、と素気ない答えをしてしまったので、その話はそれっきりになった。そんな国柄というか、国民性の相違を感じさせられた思い出があるので、この晩の彼の問いに、風向きの変化のようなものを感じたわけであった。

私は戦後の民主主義教育は人権にのみ重点を置き過ぎた結果、人間が一方では合理精神の要請に従属するとともに、他方では個人権力拡大の欲求に盲従する傾向を招来したために、却って孤立の傾向を深めて、人間相互の間柄をぎすぎすさせてしまったこと。また、それの当然の成り行きとして人類を支えている地球や動植物などの人間外の諸生命との脈絡に盲目になりつつあるので、若い世代の人々の考えはつかみ難いが、一般日本国民の心の底流としては、皇室に対する信頼は失われていないように思う、とまことに漠然たる答えをした。

彼はそれを受けて「その点だよ、日本国民と皇室との情のつながり、これが本当の宗教だと思う。キリスト教文化は、それゃ今日、明日ということではないけれども、それに蓄積したエネルギーもあることだから、すぐにというわけではないが、やがて亡びるだろう。所詮、人間意志の宗教なのだから」といって、ふと、悲痛の思いに迫られたかのようにひと言「われわれのカイゼルは亡命した」と、第一次大戦末期の顚末を回顧して絶句した。彼の脳裏には今次大戦の終戦時の日本国天皇の行為との比較が浮んだのだろう。

それから私たちはかつての人類には、時代や民族の相違を越えた原始宗教といったもの、どんな法律的随意にも妨げられなかった「自然法」が「善悪の彼岸」にあったこと、それはより多く母権制的なものであったが、この自然法が人間と宇宙、さらに人間相互の緊密な脈絡を守っていた時代のあったことなどを話し合った。そして彼が日本の皇室には今なおそういうものが生きつづけているのではないかという重ねての質問に、それ

ア、祭事と国事とがマツリゴトとして同義であった時代はあったが、今日では分離されていること、しかし政治責任から離れた天皇の新憲法に定められた国事以外に、天皇の重要なお仕事は祖霊と天地の森羅万象の八十霊（やそみたま）に対する祭事であることを紹介した次第であった。

さて、両陛下ご帰国の一日前に私も羽田に着いて、それからむさぼるようにご訪米中及びその後の諸報道に注目した次第であった。その中で、ライシャワー教授の「天皇ご訪米とアメリカ人」は印象深い論説の一つであって、内容は「両陛下がまさに温かい、魅力的お人であり、単なる畏敬すべき〝象徴〟ではないという気持ちを（アメリカ人に）広く抱かせた」ことを具体的に述べられたものであった。私どもとしても従来とかく「物質的」とのみ決めつけ勝ちであったアメリカをもっとよく知らなければという気持ちにさえ駆られるものであった。しかしまた、私としてはこの論説の中でもたびたび用いられている「象徴」の意味をもう一度見直してみたい気持ちになった。

三十年前、日本国新憲法で天皇を「日本国の象徴」と規定された当時、私どもを含めて、天皇は象徴に過ぎないのか、という何か自嘲めいたとまではいかないにしても、割り切れない感じを抱いた人は少なくなかったと思う。しかし、その後少しばかりものを学んで行った間に、象徴という語の本当の意味に眼が開かれた思いを経験して以来、この規定のよさを感じている一人なので、それを述べてみようと思う。

象徴という語はもともと中国語や日本語にはなく、シンボルの日本訳として出来上ったものであること、そして何かの「しるし」であることも明らかである。しかし、「しるし」といっても、見かけは一義的であるようだけれども、やはりいくつかの意味があって、中でも次の三主要群が言語的に区別される。徴候、証候、前兆――目じるし――象徴と。

この中で「目じるし」というのは全て少なくとも識別に役立てられるので、常に識別標である。識別標というのは精神的に気づかれるものであるけれども、自然のものもあれば、人工的のものもある。自然のものとしては桜の葉と椿の葉とを識別させる目じるしがあるが、人工的なものとしては所有標、商標、紋章、階級章、更に始業を告げる鐘の音、交通信号の着色光、或いは合図、信号などの全てがある。

さて、温度計の目盛りの変動はさしあたってこの変動の力学的原因であるもの、即ち気温の変動だけを教えるものであるし、同様に気圧計の目盛の変動は気圧の変動のみを、湿度計の目盛

の変動は湿度の変動のみを教えるのであるが、気象学者はそれから翌日降雨の公算を結論する「徴候」とする。同様に、医師には症候（病気の徴候）はすなわち必要な処置の「指示」となるといった工合である。因みに動物の習性は、自然界の諸変化がそれぞれの動物にとって牽引か反撥かのいずれかの徴候的現象になることで決定されている。

これらに対し、象徴の原語シンボルは、集まる、符合するなどを意味する動詞からできたギリシャ語名詞シェンボロンに由来するけれども、この名詞はギリシャ時代では契約とか、認識票の意味までにとどまっていた。この言葉に教会の儀礼などに教会用語として取り入れられるようになって意味の変遷が生じたのであるが、この意味を活用してドイツ・ロマン期哲学者たちの祭祀や遺跡などの研究の決定的歩みを進めたものであった。それは例えば古代ギリシアのエレウシスの成年式で神棚に供えられた小箱の中には穀物の穂が納められてあったが、古代人はこの穂に永遠に更新する生命を観得し、それに思いを馳せて成年者を祝福したことを知ったとき、この穂を永遠に更新する生命の「象徴」として、両者の脈絡をとらえることができたのである。シンボルのドイツ語訳 Sinnbild（意味形象＝象徴）の語でこれを再現したわけであるが、それは意味、或いは心を表出する「しるし」という連関であった。象徴というのは、その「しるし」の中に、即物的判断の加わらない前の、体得的に観得される意味或いは心が保有されていて、人はそれによってそれの意味或いは心を「憶う」ことができるものである。

このように「象徴」の意味を味得するとき、天皇と日本国との脈絡を言い表わすに、天皇は日本国の象徴であるという以上に適切な規定は、その外にないではなかろうか。天皇は日本国の心の具象と言い換えられもする中味である。そして日本国の心といえば、卑近な例でいうなら、私どもが静かに祖父母の墓前に立ったときのあのさわやかな気持ち、要するに祖霊、天地の八十霊に寄せる敬虔なこころであろう。

もとより長い歴史の間にはこの脈絡の疎密の盛衰を免れなかったし、また免れないであろうが、この意味を以てすれば、前掲のライシャワー教授の言葉も「両陛下は日本国の敬愛すべき〝象徴〟の実を広くお示しになった」と言い換えられるだろう。言葉というものは、ひとたび発表されると、語り手の意図を離れて、言葉そのものに固有する勢力を発揮するものである。それが言霊（ことだま）というべきものである。

（東京女子医科大学）